

## 戦時下の歌

——内地における『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の普及に  
関する検討——

The memory of songs during the World War II

丸山 彩\*

### はじめに

戦時下においては、戦意高揚や団結を目的として、時局にあったさまざまな歌が歌われた。幼少期に親しんだ歌は、歳を重ねてからも耳に馴染んでいるものである。本研究では、戦時期を過ごした人々の記憶を手がかりとして、当時普及した歌について迫りたい。戦時期の歌の中でも、本稿で着目するのは、『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』（以下、『ウタノエホン』）である。『ウタノエホン』は、「大東亜共栄圏」各地に「大東亜」の理想と日本の真意を知らしめると同時に、日本語を進出させることをも目的として作成された唱歌集である<sup>1)</sup>。「南方」向けを意図しながら編纂された同唱歌集は、昭和18（1943）年9月に朝日新聞社によって内地で刊行されている。

『ウタノエホン』については、酒井健太郎による一連の研究がある<sup>2)</sup>。さらに、アンケート調査とインタビュー調査を駆使して、国民学校の音楽教育の実態に迫った研究として、本多佐保美・西島央・藤井康之・今川恭子編著『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』（開成出版、2015年）がある。同書では、今川恭子が、当時の子どもたちが学校で歌った歌について取り上げ、教科書収録曲、儀式の歌、軍歌・軍国歌謡に分類してい

\* 立命館大学人文科学研究所客員研究員

る<sup>3)</sup>。本稿においては、『ウタノエホン』に加えて、当時歌われた歌について、対象曲を絞って調査し、それぞれの歌に関する人々の記憶をたどる。

酒井は、『ウタノエホン』で表現されたものは日本人に対するメッセージであり、日本の「少国民」を教育するものでもあったと述べている<sup>4)</sup>。『ウタノエホン』が日本の子どもたちをも対象にしたものであったならば、同唱歌集の収録曲は当時の子どもたちにどの程度歌われていたのだろうか。本稿では、戦時期に子ども時代を過ごした人々の記憶を頼りに、『ウタノエホン』の内地における普及について検討する。『ウタノエホン』収録曲の認知度は、戦時期に歌われた他の歌と比較することで、浮き彫りにしたい。

## 1. 内地における『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』

### (1) 『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の刊行

絵本と附録の楽譜からなる『ウタノエホン』は、昭和18年9月に朝日新聞社より刊行された。同唱歌集に収録されているのは、《ヒノマル》《フネ》《ボクラノヘイタイサン》《ダイトウア カゾエウタ》《コモリウタ》《アイウエオノウタ》《オコメ》《ニッポンノコドモ》《アジアノコドモ ウンドウクワイ》《ニッポンノアシオト》の全10曲である。刊行までの経緯は、酒井健太郎の研究に詳しい<sup>5)</sup>。同唱歌集の「刊行のことば」によれば、既に「南方版」が刊行されており、収録曲は「南方」の子どもたちに愛唱されているという。松岡昌和によれば、シンガポールの子どもの向け新聞『サクラ』には、同唱歌集に収録された《ダイトウア カゾエウタ》《アジアノコドモ ウンドウクワイ》の2曲が掲載されていた<sup>6)</sup>。また、ジャワで刊行された雑誌 *Djawa Baroe* (『ジャワ・バル』)には、同唱歌集刊行前の昭和18年7月より、収録順に順次10曲すべてが掲載されていた<sup>7)</sup>。以上のように、シンガポールやジャワにおいて、新聞や雑誌に掲載されていたものの、同唱歌集の南方版は現在のところ発見されていない。

次に、『ウタノエホン』刊行までの流れについて概観したい。同唱歌集刊行に先立ち、まず昭和18年1月29・30日に東京女子高等師範学校において開催された全国音楽教育者錬成大会で歌唱指導が実施された<sup>8)</sup>。続いて、同年3月6日には、朝日新聞社7階の講堂において、レコード視聴会と舞踊発表会が実施された<sup>9)</sup>。このとき、吹き込みの完成したコロンビアのレコードを視聴している<sup>10)</sup>。そして、同年4月10日には日比谷公会堂において、発表演奏会が行われ一般に公開された<sup>11)</sup>。発表会で同唱歌集の収録曲を歌ったのは、ニッチク児童合唱団、東京市の京橋昭和国民学校・久松国民学校・大和田国民学校の児童等であった<sup>12)</sup>。東京でごく一部の子どもたちが歌うことによって披露された『ウタノエホン』収録曲は、内地では広く普及したのであろうか、以下検証していく。

## (2) 調査の概要

本研究では、終戦時に国民学校2年生以上（昭和12年度生まれ）だった者を対象として、歌の認知度の調査を行った。この年齢を下限としたのは、戦時期の初等教育を1年以上受けており、学校で歌った記憶を聞くことができると期待されるためである。調査協力者（以下、協力者）は、『ウタノエホン』収録の全10曲および後述する7曲の歌の音源を聴き、1曲毎に認知度について回答した。同唱歌集の刊行には後援に文部省も名を連ねており、レコードも発売されているため、当時の教科書には掲載されていないとはいえ、学校教育の教材として採用されたことが考えられる。認知度は、1を「歌うことができる」とし、2「歌ったことがある」、3「聴いたことがある」、4「聴いたことがあるかもしれない」、5「全く知らない」と数字が上がる毎に認知度が低くなっていく5段階評価を用い、協力者は1～5の数字で回答した。また、協力者からは対象曲についてのエピソードも可能な限り尋ねた。

協力者の生年月、性別および戦時中に住んでいた地域は、表1の通りである。出身地等の市町村名は現行の行政単位で表記している。なお、回答にあ

たっては匿名とし、生年月・性別・居住地等の個人情報は本研究のみに使用し、個人が特定されることがないように配慮する旨を説明し、了承を得た。

男 A は神戸市に居住し、摩耶小学校を卒業後、旧制の神戸市立神戸中学校へ進学した。旧制中学校在学中に呉の航空隊に志願し、中学校を退学、呉に駐在するも、飛行機の数に足りずに 10 日で戻ってきた。その後、召集令状が届くものの、入隊予定日までに終戦を迎えたため、戦時中をほぼ神戸で過ごしている。女 A は、朝鮮の咸興で生まれ、朝鮮総督府の地方課長をしていた父に伴い終戦まで京城に居住していた。京城の三坂小学校を卒業後、京城第二高等女学校に進学し、女 A の学年は 4 年次在学中に 5 年生と同時に 1 年繰り上げて卒業をした。高等女学校卒業後は、日本人学校の清和女塾へ進学し、終戦後の昭和 20 (1945) 年 12 月に引き揚げた。男 B は、浜松市の富塚尋常高等小学校を卒業した。男 C は、浜松市の積志尋常高等小学校を卒業後、自動車の修理工として働いた。女 B は、大阪市の大仁国民学校を卒業後、金蘭会高等女学校へ進学した。女 C は、浜松市の新居国民学校を卒業後、私立の西遠女子学園に入学した。男 D は、神戸市の稗田国民学校在学中に家族で和歌山県新宮市に疎開し、丹鶴国民学校に通った。国民学校卒業後は、旧制の新宮中学校に進学している。女 D は、朝鮮の咸興で生まれた。父親の仕事に伴い、満州の桜木国民学校 (「新京」) から昭和 18 年 4 月に白梅国民学校 (ハルビン) へ転校し、昭和 19 (1944) 年 6 月には内地に戻った。内地では、6 年次にあたる昭和 19 年 6 月～11 月を松山市の石井国民学校、その後香川県小豆島へ疎開し、草壁国民学校に転校、同校を卒業した。国民学校卒業後は、香川県立小豆島高等女学校に進学している。女 E・男 E・男 F は、小学校が国民学校に改組された昭和 16 (1941) 年に、国民学校 1 年生として入学した年代にあたる。女 E は、4 年次までを京都府女子師範附属国民学校で過ごし、5 年次から近隣の桃山国民学校へ転校し、疎開はしていない。男 E は浜松市の和田村国民学校、男 F も同市の河輪国民学校に通った。女 F は兵庫県西脇市の二葉国民学校に通っていた。女 G は、2 年次まで大阪市の安立国

民学校に通い、岡山県新見市に疎開した。昭和19年からは疎開先の新見国民学校に通った。女Hは、神戸市の摩耶国民学校在学中に、集団疎開で岡山県井原市へ移り、同地の天理教の教会で過ごした。男Gは、浜松市の相生国民学校に通った。男Hは、金沢市の三馬<sup>みんな</sup>国民学校に通った。女Iは、長野県伊那市の芝平国民学校の分校（三義村）に通った。女Jは、兵庫県篠山市の今田国民学校に通った。女Kは、神戸市の遠矢国民学校1年次在学中に、神

表① 調査協力者一覧

	生年月	居住地
男A	S3.1	神戸市
女A	S3.7	朝鮮
男B	S4.5	浜松市
男C	S4.6	浜松市
女B	S6.4	大阪市
女C	S7.2	浜松市
男D	S7.5	神戸市→和歌山県新宮市
女D	S7.8	満州→松山市→香川県小豆郡
女E	S9.6	京都市
男E	S9.10	浜松市
男F	S10.2	浜松市
女F	S10.4	兵庫県西脇市
女G	S10.11	大阪市→岡山県新見市
女H	S11.1	神戸市→岡山県井原市
男G	S11.4*	浜松市
男H	S11.4	金沢市
女I	S11.11	長野県伊那市
女J	S12.6	兵庫県篠山市
女K	S12.6	神戸市→滋賀県甲賀市
女L	S12.11	徳島市
男I	S12.11	大阪市
男J	S13.1	浜松市

\*4月1日生まれ

戸大空襲に遭い、昭和20年3月に家族で滋賀県甲賀市へ疎開した。女Lは、徳島市の富田国民学校に通った。男Iは、大阪市の玉造国民学校に通った。男Jは、浜松市の与進国民学校に通った。以上が協力者の当時の居住地と通っていた学校の情報である。以上の協力者の記憶をたどると、当時歌っていた歌は、若干の地域差および年齢差が見られると考えられる。

### (3) 結果

本調査から、『ウタノエホン』収録曲はほとんど認知されておらず、回答者22名中の約半数の10名が10曲すべてを全く知らないということがわかった。各曲の認知度の平均値を出したところ、最も高かったのが《ヒノマル》と《ニッポンノ アシオト》であった。《ヒノマル》は、『新訂尋常小学唱歌第一学年用』および『ウタノホン 上』に掲載されている曲<sup>13)</sup>は、恐らくほとんどの協力者が小学校および国民学校で歌った経験があるからか、音源を流すと戸惑った表情を見せる者もいた。《ヒノマル》は音源が入手できなかったため、同曲の旋律を筆者がピアノで弾いたものの録音を聴いていただき、適宜筆者がそれに合わせて歌った。女Hは、当時は似ている曲調の唱歌が多かったため、歌詞がない音源だと聴いたことがあるかもしれないという印象を受けたという。ただし、同曲は先述した昭和18年4月の発表演奏会において、最後に全体合唱をした歌であるため<sup>14)</sup>、他の曲に比べて普及をしたことは考え得る。また、男Hは曲について説明をする前に、これは東南アジア向けの歌という印象を受けたといった旨の発言をした。《ニッポンノ アシオト》は、歌い出しの「ザックザック」というフレーズに聞き覚えがある、と女Eはいう。女Dも似ている曲があるといい、カルタに「ザックザック」が出てきたと話した。また、女Gは5段階の4か5で回答を迷っていた。歌い出しが「ザックザック」と始まる歌に童謡《霜柱》(本居長世作曲)がある。しかし、曲調が異なるため、協力者が両者を同一曲であると錯覚したとは考え難い。ただ、《ニッポンノ アシオト》は後述する「全国少国民

『ミンナウタへ大会』の一斉歌唱曲であったため、他の9曲とは異なり、耳にする機会があったと考えられる。

次に認知度が高いのが《ボクラノ ヘイタイサン》である。しかし、6名が「聴いたことがあるかもしれない」という曖昧な回答であるため、雰囲気のに似ている曲の記憶と錯覚している可能性は否めない。4名が「聴いたことがあるかもしれない」と回答した《フネ》も同様のことがいえるであろう。男Aは、《フネ》をラジオで聴いたことがあるかもしれないという。続く《ダイトウア カゾエウタ》は、女Aが「聴いたことがある」、女Eのみ「聴いたことがあるかもしれない」、そのほかは「全く知らない」といった回答である。同曲は、数え歌という特徴的な歌詞であるため、実際に聴いたことがあるのであれば記憶に残りやすいであろう。そして、《コモリウタ》《アイウエオ ノ ウタ》は2名が、《ニッポンノ コドモ》《アジアノ コドモ ウンドウクワイ》は1名が「聴いたことがあるかもしれない」と回答している。そして、《オコメ》は協力者全員が「全く知らない」との回答であった。

『ウタノエホン』収録曲2曲を「聴いたことがある」と回答した女Aは、終戦までを京城で過ごし、《ダイトウア カゾエウタ》を聴いたのは京城であったという。戦後『ウタノエホン』収録曲を聴く場面はなかっただろうから、《ニッポンノ アシオト》を聴いたのも京城だと思われる。《ニッポンノ アシオト》は『ウタノエホン』と同年に刊行された大政翼賛会による『楽譜 国民の歌』にも収録されている<sup>15)</sup>。また、同曲は昭和17(1942)年11月に開催された「全国少国民『ミンナウタへ』大会」(以下、ミンナウタへ大会)の一斉歌唱曲目を選定されている<sup>16)</sup>。ミンナウタへ大会は、東京神田の共立講堂を中央会場に、全国の聴取設備のある国民学校の講堂又は教室を地方会場として実施された<sup>17)</sup>。一斉歌唱曲目は放送および国民学校において指導、もしくは国民学校職員によって指導され、楽譜は「国民学校放送テキスト」、『少国民文化』および各少国民雑誌等にも掲載すると告知されている<sup>18)</sup>。このように、《ニッポンノ アシオト》は他の9曲とは異なり、単独で歌われ

ていたのである<sup>19)</sup>。

『ウタノエホン』に関していえば、「大東亜共栄圏」特に「南方」地域への普及を意図して編纂された同唱歌集が朝鮮に渡っていた、もしくは朝鮮版が出版されたという形跡は、現在のところ見つかっていない。朝鮮で生まれ、国民学校6年の途中までを満州・ハルピンで過ごした女Dは、『ウタノエホン』収録曲をまったく知らなかった。女Dによると、唱歌は歌詞を覚えさせられたため、曲調よりも歌詞に記憶がないという。また、同唱歌集が刊行された昭和18年、女Aは既に高等女学校に在学しているため、子ども用を意図した同唱歌集収録の歌を学校教育の場で聴いたとは考えがたい。女Aがどこで聴いたのかといえば、同唱歌集の刊行に伴う発表の場が、京城で設けられていたのであろうか。今後さらなる調査が必要である。先述したように、『ウタノエホン』が披露されたのは東京女子高等師範学校を会場に開催された全国音楽教育者錬成大会、朝日新聞社で開催されたレコード視聴会および舞踊発表会、日比谷公会堂での発表演奏会である。これらはいずれも東京での開催であり、『ウタノエホン』収録曲を歌った、もしくは耳にする機会は、「ミンナウタへ大会」における《ニッポンノ アシオト》の一斉歌唱を除けば、東京ということになる。『ウタノエホン』はレコードも発売されたとはいえ、内地においては広く普及したとはいえないであろう。

## 2. 戦時期の歌

### (1) 調査の概要

前章で述べた『ウタノエホン』収録曲と同時に、協力者に対して、戦時期の歌についても認知度の調査を行った。対象曲は、《隣組》《愛国行進曲》《愛国の花》《くろがねの力》《海ゆかば》《歩くうた》《軍艦行進曲》の7曲である。これらの歌の選定理由は、筆者がインドネシア・ジャカルタ近郊で日本の占領期を知る世代に歌の認知度の調査を実施した際、調査協力者が実際に



表② 『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』の認知度

	男A	女A	男B	女B	男C	女C	男D	女D	男E	女E	男F	女F	男G	女G	男H	女H	男I	女I	男J	女J	男K	女K	男L	女L	男I	男J	
ヒノマル	4	5	4	5	5	5	5	3	5	4	5	5	5	5	4	5	5	4	5	5	4	5	5	4	5	4	5
フネ	4	5	4	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
ボクラノ ハイタイサン	5	5	4	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	4	4	5	5	4	5	5	4	5	5	5	5	5	5
ダイトウア カゾエウタ	5	3	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
コモリウタ	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
アイウエオ ノ ウタ	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
オコメ	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
ニッポンノ コドモ	5	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5
アジアノ コドモ ウンドウクワイ	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5	5	5	5
ニッポンノ アシオト	5	3	3	5	5	5	5	4	4	4	4	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	4	5	5	5

表③ その他の歌の認知度

	男A	女A	男B	女B	男C	女C	男D	女D	男E	女E	男F	女F	男G	女G	男H	女H	男I	女I	男J	女J	男K	女K	男L	女L	男I	男J
隣組	2	1	1	2	2	2	2	1	1	2	2	2	1	1	1	3	4	3	4	3	2	1	1	1	3	3
愛国行進曲	2	1	1	2	2	2	2	1	1	2	2	2	1	2	1	3	5	5	5	5	3	2	1	3	3	3
愛国の花	3	1	1	2	3	3	3	1	1	3	2	3	1	2	1	3	5	4	2	2	2	2	3	3	3	3
くろがねの力	5	3	1	3	5	3	3	3	2	3	3	5	3	3	2	3	5	5	5	5	5	3	4	4	4	4
海ゆかば	3	1	1	5	2	2	1	1	1	3	2	5	1	1	2	3	5	4	4	4	4	2	1	4	4	4
歩くうた	5	1	1	3	5	3	1	1	1	3	3	5	1	3	1	3	4	5	3	3	3	2	5	5	5	5
軍艦行進曲	3	1	1	2	3	3	1	1	1	1	1	5	1	3	1	2	5	3	3	3	3	3	1	2	2	2

歌ってくれた歌であったことによる。インドネシアの調査協力者自らが記憶し、歌うことができたことから、内地の同世代の人々が当時実際に歌っていて、認知されている歌であるか検証するのに適当な歌だと判断した。また、《軍艦行進曲》は当時インドネシアで上映された映画で複数回使用されていたため、同様に選定した。以下、各曲の特徴について述べたうえで、調査の結果について検討したい。

《隣組》は戦時体制下で組織された隣組を歌い、ラジオ番組『国民歌謡』で高い評価を得た親しみやすい歌である<sup>20)</sup>。作詞は岡本一平、作曲は日本軍のジャワ島占領後には同地の音楽政策にあたった飯田信夫である。同じく対象曲とした《歩くうた》も飯田による作曲である<sup>21)</sup>。

《愛国行進曲》<sup>22)</sup>は、昭和12(1937)年9月に国体観念の高潮および士気高揚を目的とし、内閣情報部(後の情報局)によって歌詞が公募された。同年11月3日に森川幸雄の当選歌詞が発表されると同時に、楽曲も公募され、当時70歳だった退役海軍軍楽長の瀬戸口藤吉の作品が選ばれた。「第二の国歌」といわれている。

《愛国の花》は、日清戦争時の《婦人従軍歌》のように、婦人産業戦士たちが愛好した曲<sup>23)</sup>で、ラジオ番組『国民歌謡』でも放送された。インドネシア初代大統領・スカルノが同曲を好み、自らインドネシア語の歌詞を作って愛唱した<sup>24)</sup>。そのため、インドネシア在住の人々にとっても、耳にしたことがあったのであろう。

《くろがねの力》<sup>25)</sup>は、作詞が浅井新一、作曲が江口源吾(夜詩)、大日本体育協会選定の歌で、「体育行進曲」という肩書きが付いていた。ラジオ番組「国民歌謡」でも放送された歌である。

《海ゆかば》<sup>26)</sup>は、『万葉集』に収録された大伴家持の長歌の一節で、天皇のためには死を恐れないという日本人古来の最高道徳を歌った歌である。この歌詞に対して、日本放送協会からの委嘱を受けた信時潔が、総理大臣その他顕要の地位にある者が放送で講演する際のテーマ音楽として、昭和12年

に曲を付けた。昭和18年12月には、文部省および大政翼賛会は同曲を儀式に用いることを決め、《君が代》に次ぐ準国歌の役割を果たした。戦争末期のラジオ放送では、玉砕を報道する大本営発表のテーマ曲として使用された。

《軍艦行進曲》<sup>27)</sup> は、《海ゆかば》が一種の鎮魂歌の役割を果たしたのに対して、日本軍が戦果をあげたニュースの際に演奏された。華族女学校教授・鳥山啓の歌詞は、元々は明治26(1893)年刊行の『小学唱歌 卷之六下編』に収録されていた《軍艦》(山田源一郎作曲)による。明治30年頃に、当時横須賀海兵団軍楽隊・軍楽兵曹長であった瀬戸口藤吉によって軍歌としての主要旋律が作曲され、後に行進曲の形に仕立てられた。

## (2) 結果

まず、協力者22名中1名(男B)が7曲すべてを、4名(女A・女D・女E・女G)が6曲を「歌うことができる」と回答していることに注目したい。この4名が歌うことができない(「歌ったことがある」もしくは「聞いたことがある」)と回答したのは、いずれも《くろがねの力》であった。男Gも《くろがねの力》と《海ゆかば》を「歌ったことがある」、あとの5曲は「歌うことができる」と回答している。《くろがねの力》は「体育行進曲」といわれ、男子が歌う機会が多い歌であったため、女性にとっては聞いたことはあっても歌う機会はなかったのだろう。女Eのみ「歌ったことがある」、あとの3名は「聞いたことがある」と回答している。《くろがねの力》の7曲の中で認知度は最も低かった<sup>28)</sup>。女Aは《くろがねの力》は、最後のフレーズのみ知っているという。

一方、女性歌手の渡辺はま子が歌った《愛国の花》を歌うことができると回答した男性は男Bのみである。《愛国の花》は歌詞の内容からして、男性が歌う歌ではない。男Aは《愛国の花》をラジオでよく聞いたという。「歌うことができる」と「歌ったことがある」というのは、ニュアンスの取り方

が協力者毎に異なり、諳んじて歌うことができる場合から、メロディを口ずさむことができる程度まで、幅広く「歌うことができる」と判断している可能性がある。中には、歌は苦手なので歌えないと断って回答する協力者もいたため、その場合は「歌ったことがある」と回答している。そのため、「歌うことができる」「歌ったことがある」という回答については、該当曲を認知しているといえる。

ほぼ認知されているとあってよい歌が、《隣組》である。協力者22名中18名が「歌うことができる」もしくは「歌ったことがある」と回答している。「聴いたことがあるかもしれない」と回答した女Iは、全曲を通して対象曲をあまり認知していない。これは、女Iが通っていた国民学校が分校であり、生活圏が閉鎖的な空間であったことが影響しているのではないだろうか。同様に「聴いたことがある」と回答した女Jも、都市部から離れた地域に居住していたため、同曲に馴染みがなかったのかもしれない。一方、女Dは満州では聴くことがなく、同曲を知ったのは内地に帰ってからで、内地では自分は知らないのに周りが歌っていたという。同様に、女Dは《愛国の花》を知ったのも内地に帰ってからだというので、《愛国の花》や《隣組》に比較的馴染みがあるジャワとの地域差も見られる。また、《隣組》は、その旋律が戦後もテレビ番組のテーマ曲に採用され、現在でもテレビ・コマーシャルに用いられている。そのため、女Iと女Jは戦時中に聴いたのではなく、戦後に耳にしたのを記憶している可能性がある。

《愛国行進曲》は最も有名な軍歌の一つだといってよいだろう。認知度も《隣組》に次いで高い。男Aは、《愛国行進曲》を学校もしくは軍隊で歌ったといい、女Aは女学校でよく歌っていたという。しかし、女Iと女Jは《愛国行進曲》を知らなかった。これも、先述した生活環境の違いによるものであろう。

《海ゆかば》は、《君が代》と並んで学校儀式で歌われた歌である。女Eの通っていた京都府女子師範学校附属国民学校では、児童の家族が戦死した際

の集会において歌われていた。しかし、「海ゆかば みづく屍」という歌詞は子どもにとっては理解し難く、女Eの友人は当時「海に行けばカバが寝ていて、山に行ってもカバが寝ている」とカバが寝ている歌だと勘違いをしていたと大人になってから語ったという<sup>29)</sup>。実際に歌われていたといっても、歌詞を学習するというよりは暗唱することが優先されたことが垣間見える。しかし、女Fと女Jは同曲も知らなかった。同曲についていえば、年代が若くなるにつれ、比較的認知度が低くなっていることがわかる。そのため、準国歌の扱いを受けたといってもすべての国民学校において歌われていたわけではなく、戦争末期に近づくとも歌われる機会も減ったのではないだろうか<sup>30)</sup>。女Dは満州にいた時からラジオ等で同曲を知ってはいたものの、授業で歌うことはなかったと話した。

《軍艦行進曲》は《愛国行進曲》《隣組》に続いて認知度が高く、有名な軍歌であるものの、《海ゆかば》と同様に女Fと女Jは知らなかった。しかし、《軍艦行進曲》は旋律が有名であっても、歌詞があることを知らない場合があり、「聴いたことがある」という回答が多くなっている。男Aを除き、男性は歌った経験があった。しかし、歌うことはなくても、男Aは毎日同曲を聴いていたという。女Aによれば、京城で歌われていたから自然と歌えるようになり、ラジオでも聴いたという。女Eの周りでは、「じゃんじゃんじゃがいも」と替え歌で歌うのが流行っていた。男Dの通っていた学校では、運動会のような催しで耳にしたという。

《歩くうた》は、《くろがねの力》よりは認知度の平均値が高く、男性の回答に着目してみても、男Gと男Iにとっては《くろがねの力》よりは馴染みがあった。しかし、男性といえども年齢が最も若い男Jは、同曲を知らなかった。これは、《歩くうた》を学校での行進の際に採用しているか否かの違いも関係しているであろう。

### (3) 『ウタノエホン』 とその他の歌

17曲の歌の認知度について検討するにあたり、まず歌うことには得手、不得手があり、先にも指摘したように「歌うことができる」という基準も各人によって異なることを踏まえての結果であることを考慮しなければならない。なお、回答に際して、男Aは歌うことが好きではないため、「歌うことができる」歌はないと断言し、当時から歌は聴くことはあっても自ら歌うことはなく、歌ったことがあるのは学校で歌わされたからだという。男Aによると、《隣組》を歌ったのも学校であった。また、歌うことは苦手なので歌うことはできない、と断った上で回答をした協力者もいた。「聴いたことがある」「聴いたことがあるかもしれない」という回答については、記憶が定かではないため、似た曲調の曲と混同している可能性は否定できない。回答者22名の出身地もばらつきがあり、年齢層にも幅があるため、本調査の結果がすべてを示すものではない。そのため、本稿では戦時下の歌の認知度を知る手掛かりを提示したい。

『ウタノエホン』とその他の歌の認知度を比較すると、『ウタノエホン』がほとんど認知されていないことが明らかである。その他の歌の中で、最も認知度が低かった《くろがねの力》でさえ、歌った経験がある者がいたのに対して、『ウタノエホン』で最も認知度が高かった《ヒノマル》《ニッポンノアシオト》は、歌った経験のある者はいなかった。これらの曲の認知度は、調査を通して、協力者の反応を見ても明らかであった。『ウタノエホン』10曲の音源を順に流すと、聞き覚えのない歌が続くことに苦痛な様子を示す協力者もいたのに対して、その他の7曲を流すと、前奏を聴くだけで表情が変わったり、懐かしそうな表情を浮かべたり、馴染みの歌を聴いている様子が見て取れた。これらの歌は、学校や町、さらには家庭のラジオから耳にし、歌った歌であった。一方、『ウタノエホン』はその他の歌とは異なり、学校で取り上げられることもなく、ラジオから耳にする機会もほとんどなかったのである。

## おわりに

本稿では、戦時期に「南方」向けに内地で刊行された『ウタノエホン』が、内地で普及したのか、すなわち当時の子どもたちに歌われたのかを明らかにするため、当時子ども時代を過ごした世代への調査を通して検討した。調査の結果、『ウタノエホン』の収録曲は、その他の歌に比べて、認知されておらず、内地の子どもたちはほとんど歌っていなかったという仮説が導き出された。ここで仮説としたのは、本調査では当時の居住地を限定せず、可能な限りで協力を求めたものの、レコードの吹き込みで合唱をした子どもたちや、発表演奏会に出演した子どもたちの記憶ではないためである。本調査の協力者には、東京出身の者はいなかった。今後、本研究を深めていくためには、当時東京に居住していた者、さらには発表演奏会の出演者や「ミンナウタへ大会」にラジオを通して参加した者を見つけ出すことが必要である。

本調査の結果には、『ウタノエホン』以外の歌にも注目すべき点がある。それは、戦時中の学校儀式で歌われていた《海ゆかば》を知らない協力者がいたことである。これは、単に当該者が歌ったことを記憶していないだけなのか、学校によっては《海ゆかば》を歌っていなかった可能性も示唆される。さらに、《愛国行進曲》《軍艦行進曲》といった有名な軍歌も当時すべての人々が耳にしたわけではなかった。

戦後70年以上が経過した現在、当時を知る人々から戦時下の体験を聴くことは困難になりつつある。当時を知る人物の記憶は語り継がれる必要がある反面、記憶が確かな情報であるか注意することも必要である。本調査は、協力者の記憶に大部分を依拠しており、対象者にも偏りがあるため、戦時下の歌について一般的な認知度を示し得たとはいえない。しかし、当時を知る人々からの証言は価値のあるものとして、記録しておきたい。



## 凡例

本稿の参考史料中の旧字体はすべて新字体に改めた。

## 謝辞

本研究を行うにあたり、調査に応じてくださった協力者の方々、および対象者をご紹介いただいた皆様に感謝申し上げます。

## 注

- 1) 「大東亜共栄唱歌集 入選歌五篇決る 少国民文協四篇も同時発表」『音楽文化新聞』第36号、1943年1月1日、10頁。酒井健太郎によると、当初は各国固有の旋律を用いて、歌詞も各国語に翻訳する計画があり、次第に日本語の進出に重点が置かれるようになったという(酒井健太郎「日本音楽文化協会の対外事業——『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」、戸ノ下達也・洋楽文化史研究会編『「戦う音楽界」——『音楽文化新聞』とその時代』金沢文圃閣、2012年)。
- 2) 酒井健太郎「日本少国民文化協会(1941～1945年)の事業について」、昭和音楽大学音楽芸術運営研究所『音楽芸術運営研究』2、2009年、前掲、同「日本音楽文化協会の対外事業——『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」、同『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)研究序説——研究の意義と方法——」、昭和音楽大学『研究紀要』31、2012年、同『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)の歌詞と絵の分析」、昭和音楽大学アートマネジメント研究所『音楽芸術運営研究』5、2012年。
- 3) 軍歌・軍国歌謡の中でも、突出して頻繁に学校で歌われていた《愛国行進曲》と《海ゆかば》に焦点をあて、アンケートおよびインタビュー調査と学校所蔵文書から、学校の中での位置付けについて検討されている(今川恭子「子どもたちが歌った歌——社会の中の子ども、子どもの中の社会」、本多佐保美他編著『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』開成出版、2015年、第二章 歌唱 第二節)。
- 4) 前掲、酒井健太郎『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』(1943年)の歌詞と絵の分析」。
- 5) 前掲、酒井健太郎「日本音楽文化協会の対外事業——『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」。
- 6) 松岡昌和「日本軍政下シンガポールにおける歌の教育と『日本イメージ』」『一橋日本語教育研究報告』3、2009年。松岡は『サクラ』を1942年6月10日の創刊号から1943年12月15日刊行の第39号をまとまった形で、1944年4月1日刊行の第45号と1945年4月15日に刊行された号を部分的に確認しており(松岡昌和「日本軍政下



シンガポールにおけることも向け音楽工作『アジア教育史研究』第18号、2009年）、未見の号に掲載されていればさらに増える可能性がある。

- 7) 丸山彩・織田康孝「日本軍政下のジャワにおける歌——グラフィック雑誌『ジャワ・バル *Djawa Baroe*』を素材に——」『立命館大学人文科学研究所紀要』第107号、2016年。
- 8) 前掲、酒井健太郎「日本音楽文化協会の対外事業——『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」でも指摘されているように、『音楽文化新聞』第44号（「共栄諸国の児童達に贈る“大東亜共栄唱歌集”発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」、1943年4月1日、1頁）では、1月29日とされ、『少国民文化』第2巻第3号では同月30日に、歌唱指導ではなく披露されたという記述にとどまっている（「ウタノエホンの全曲を披露」、1943年3月、61頁）。
- 9) 前掲「共栄諸国の児童達に贈る“大東亜共栄唱歌集”発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」、「ウタノエホン 舞踊発表会」『朝日新聞』1943年3月7日、3面。
- 10) 前掲「ウタノエホン 舞踊発表会」。前掲「共栄諸国の児童達に贈る“大東亜共栄唱歌集”発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」では、レコード化はニッチクにおいて担当したとされている。日本コロムビア蓄音機株式会社は、昭和17（1942）年8月に社名を日蓄工業株式会社に変更し、日本語教育学会発行の『戦前戦中の日本語教育教材レコード 復刻版』（2003年、カセットテープ7巻組）第3巻に収録された『ウタノエホン』の一部もニッチクによる録音ということである（前掲、酒井健太郎「日本音楽文化協会の対外事業——『ウタノエホン 大東亜共栄唱歌集』を中心に」）。筆者も酒井氏にこれらの音源を聴かせていただいたところ、《フネ》《ダイトウア カゾエウタ》は冒頭にニッチクによるレコードだとわかる音声が録音されていた。しかし、当初レコード化は日本蓄音機協会が担当し、一社独占ではなく同協会に加盟するピクチャー、コロムビア、大東亜、キング、テイチクの5社に2曲ずつ担当するよう折衝されていた（「大東亜共栄唱歌集は五社で二曲宛音盤化」『音楽文化新聞』第30号、1942年11月1日、12頁）。
- 11) 前掲「共栄諸国の児童達に贈る“大東亜共栄唱歌集”発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」、「ウタノエホン・大東亜共栄唱歌発表会」『朝日新聞』1943年4月8日、3面、『朝日新聞』1943年4月10日、3面広告。
- 12) 前掲「共栄諸国の児童達に贈る“大東亜共栄唱歌集”発表会 音盤・絵本も近く発売の予定」。
- 13) 『新訂尋常小学唱歌 第一学年用』（1932年）に収録された《日の丸の旗》の1番の歌詞が「白地に赤く 日の丸染めて、ああうつくしや、日本の旗は。」は、国民学校の教科書『ウタノホン 上』（1941年）では曲名も《ヒノマル》と改訂され、1番の歌詞は「アオゾラ タカク ヒノマル アゲテ、アア、ウツクシイ、ニホンノ ハタハ」となっている。
- 14) 「南へ響け“日の丸の歌”『ウタノエホン』発表演奏会」『朝日新聞』（大阪）、1943年4

月11日、3面。

- 15) なお、本調査の対象曲である《愛国行進曲》《愛国の花》《くろがねの力》《海ゆかば》《軍艦行進曲》も同書に収録されている。
- 16) 「来ル十一月七日日本放送協会協会と共催下に 全国少国民『ミンナウタへ』大会」『少国民文化』第1巻第4号99頁、1942年9月。なお、ミンナウタへ大会については、山中恒『ボクラ少国民と戦争応援歌』（クリエイティブ21、1997年）九、少文協が歌で少国民にしたこと（173～194頁）、前掲、酒井健太郎「日本少国民文化協会（1941～45年）の事業について」において言及されている。そのほかの一斉歌唱曲目は、《鍛える足》（文部省唱歌）、《進め少国民》（園英二作詞・渡邊浦人作曲）、《朝日は昇りぬ》（文部省唱歌）、《愛国行進曲》であった。なお、『ボクラ少国民と戦争応援歌』は1985年に音楽之友社から刊行された同名書の改訂版である。
- 17) 趣旨として「放送ニヨリ全国ノ少国民ヲシテ同一歌曲ヲ同一時ニ唱和セシメ音楽ヲ通シテ少国民ノ団結ヲ強化シ大東亞建設推進ノ意気ヲ旺盛ナラシメ併セテ歌唱力ノ向上ニ資セントス」と掲げられた（前掲「来ル十一月七日日本放送協会協会と共催下に 全国少国民『ミンナウタへ』大会」）。
- 18) 前掲「来ル十一月七日日本放送協会協会と共催下に 全国少国民『ミンナウタへ』大会」。昭和17年7月17日、情報局における「少国民皆唱大会（仮称）実施案検討懇談会」で、一斉歌唱曲目の楽譜は「学校放送テキスト」および『国民教育』に掲載されることが決定し、これらの曲目の放送は30分とされた（『少国民文化』第1巻第4号、137頁）。
- 19) さらに、昭和18年12月には二葉書房より『ニッポンノアシオト』と題する絵本も発行されている（酒井健太郎氏のご教示により、国会図書館の館内限定デジタル化資料を閲覧した）。絵本『ニッポンノアシオト』については、稿を改めて検討したい。
- 20) 戸ノ下達也『越境する近代5 音楽を動員せよ 統制と娯楽の十五年戦争』、青弓社、2008年、129頁。戸ノ下は、『国民歌謡』で放送された歌を「芸術歌曲、ホームソング」と「教化、動員、意識昂揚を狙いとした楽曲」に分けて整理している（124～127頁）。後者は、さらに女性を歌ったもの（《愛国の花》）、軍事関係以外の国家イベントのための楽曲、皇国・皇軍賛美の楽曲（《愛国行進曲》）、国民精神総動員運動に呼応して制定された楽曲（《海ゆかば》）、戦時下の国民運動や国民生活に密着したテーマを題材にした楽曲（《隣組》）といった特徴に分けられる。
- 21) 松岡によれば、《歩くうた》はシンガポールの師範学校でも歌われていたという（前掲、松岡昌和「日本軍政下シンガポールにおける歌の教育と『日本イメージ』」）。
- 22) 堀内敬三『定本 日本の軍歌』実業之日本社、1969年、299～300頁。
- 23) 同298頁。
- 24) 彌吉博幸「スカルノも新たに作詞した『愛国の花』」、名越二荒之助編著『[[秘話] 大東亜戦争とアジアの歌声』（てんでんブックレットNo.2）展転社、1994年、91～93頁、

- 桜の花出版編集部編『インドネシアの人々が証言する日本軍政の真実』桜の花出版、2006年、270頁（第五部 スカルノ大統領は日本人を尊敬していた——ラトナ・サリ・デヴィ・スカルノ氏の証言）、塩澤実信『昭和の戦時歌謡物語』展望社、2012年、194頁。
- 25) 金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌（下） 学生歌・軍歌・宗教歌篇』講談社、1982年、241頁。
  - 26) 前掲、堀内敬三『定本 日本の軍歌』304～305頁、前掲、金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌（下）』202頁。
  - 27) 前掲、堀内敬三『定本 日本の軍歌』154～158頁、前掲、金田一春彦・安西愛子編『日本の唱歌（下）』140頁。
  - 28) 本多佐保美「国民学校の運動会における音・音楽」では、『くろがねの力』の遊戯をした女性の記憶が紹介されている（前掲、本多佐保美他編著『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』297頁）ため、同曲は必ずしも男子の歌という訳ではない。
  - 29) 笠木透によれば、「海にカバ 水づくカバね 山にカバ 草むすカバね おお君のへにこそ死なめ かえり見はせじ」というカバが4頭出てきて、尻で死ぬ替え歌が歌われたという（笠木透「戦時下の子どもがうたった歌——『海にカバ 山にカバ』」『子どもの文化』第46巻7号、2014年）。また、当時の子どもたちの中には、同曲の後半部分を「テンノウノオナラハ アマリニモクサクテ シンデシマイソウダ モウケツシテニドト アノヒトノチカクニハイカナイズ」と解釈をする者もいた（昭和7年生まれの男性の回想、前掲、山中恒『ボクラ少国民と戦争応援歌』268～269頁に収録）。これらのエピソードからは、歌詞の意味を教えられることがなければ勘違いをし、聴こえた音に近い解釈をする場合もあったことがわかる。
  - 30) 今川恭子は、対象者からの回答に表されるのは記憶であり、歌った事実を確かめるよりは歌った経験の痕跡を探る方が適切であり、後年まで記憶に残っているかどうかを問うという点で、単に歌った事実以上の意味がこの回答に表れているかもしれないと指摘する（前掲、今川恭子「子どもたちが歌った歌——社会の中の子ども、子どもの中の社会」、本多佐保美他編著『戦時下の子ども・音楽・学校——国民学校の音楽教育——』119～120頁）。また、今川の調査によると、『愛国行進曲』は音楽会や運動会などの行事での一斉歌唱という半ばフォーマルな扱いで、歌唱指導が行われなかった。一方、『海ゆかば』は、「授業で歌った歌」として挙げられ、フォーマルな指導がなされる位置付けの曲であったという（同146～150頁）。

